

[COMMUNION]

WEB: [http://www.nskk.org/](http://www.nskk.org/tokyo/index.html)

tokyo/index.html

E-mail: comm.tko@nskkg.org

PHONE: 03-3433-0987

FAX: 03-3433-8678

Diocese Office



《イースターメッセージ》

復活節の「疑い」と「高笑い」

主教 フランシスコ・ザビエル 高橋 宏幸

「復活節の疑い」「復活節の高笑い」という言葉があることを、以前耳にしました。「疑い」とは、「イエスが甦られたと言われても疑わしいものである」という事だと思いたくありませんが、「イエス様のご復活を疑う」のではなく、「死の力を疑う」という意味です。

人は誰もがいつの日か死をお迎えし、それで全ては終わってしまうと思っています。そこに「？」を投げ掛けたのがイエス様のご復活であり、その力をいただいた弟子たちの信仰です。死についてあれこれ言っていますし、知らされていませんけれども、どうやらそれも疑わしい、人間死をもつて終わりだということがどうも怪しい、これが「復活節の疑い」の中身だそうです。

では、もう一つの「復活節の高笑い」とはと言いますと、古代、ご復活の礼拝も終わりに近づく明け方、朝日が次第に差し込んでくる頃になると皆が一斉にそっくりかえるようにして心からのお祝いと喜びの高笑いをしたそうです。イ



エス様が甦られた、死に呑み込まれていらつしやらなかった、死は終わりではない、なんと嬉しく喜ばしいことだと、死を笑い飛ばさずにはいられないという信仰が「高笑い」の中身だそうです。

イエス様の甦りの最初の目撃者がマグダラのマリアでした。福音書によ

れば、死の力の虜になっていた、つまり神様から授かった命をぞんざいに生きてきたような自分をイエス様によって再び生き返らせていただいたマリ

アは、その後もイエス様の傍に居ただけに甦りについて再三耳にはしていませんでしたが、未だ受け止めることは出来ずにいました。だからこそ、イエス様に会うためには、お墓に行くしかないと考え

ていたでしょうし、イエス様のご遺体が納められてお墓に納められていた様子も向いていました。

ところが、いざお墓へ行ってみると信じられないことになっており、天使から言われます。「恐れることはない。十字架につけられたイエスを探しているのだらうが、あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ」と。その「ここにはおられない」と言わ

れたイエス様が行く手に立って彼女らを出迎え、「平安があるように」という言葉をかけられます。すなわち「あなた方の心から恐れを取り除かれるように！」と。「死という人間を打ちのめすものに打ち勝つ恵みが注がれるように！」「人生に終わりはなく幾らでも立て直せるし、新たにやり直し始められる！」とイエス様は告げられます。そして「さあ、その恵みに与るべく、私の弟子として新たな歩みを始めなさい」「憂いや悲しみ、人をたたくきのめす力よ消え失せ、命と喜びの霊を豊かに注がれよ！」とも。イエス様の霊と力と恵みによって新しい命への招き、夜明けが与えられ始めました。春の夜明けという命の息吹、光へと向かう中、イエス様の甦りは私たちの先駆けとして神様によって引き起こされました。

イースター、おめでとうございます！

新たな宣教の拠点を目指して

～新教会の創立について司祭、信徒に聞く～

今回は特別に東京教区の中の大きな動きとして、おそらく他教区からも注目をされているであろう池袋聖公会（以下池袋）、東京聖マルチン教会（以下マルチン）、練馬聖カプリエル教会（以下練馬）の合併と新教会（インマヌエル新生教会）創立について、卓志雄司祭と、下泉小波さん（旧練馬）、田中盛人さん（旧マルチン）、照岡好枝さん（旧池袋）の3名の信徒の方からお話を伺いました。（文中、お名前の敬称は略させていただきます。）

― まず始めにお聞きしますが、それぞれの教会でこの合併を考えるきっかけがあったと思うのですが、それについてお聞かせください。

下泉 もともとは卓司祭がマルチンの管理司祭になり、池袋の協力司祭になった時、大畑主教からゆくゆくは3教会が一緒になることを考えてほしいという話があったのです。

― いつ頃のことですか。

卓 その前、中村淳司祭の時から合併の話はあったと思うのですが、その辺りからだと2012年くらいからです。

下泉 それと教区再編成の動きがあり、気持ちの中では準備ができていて、そこにマルチンの教会委員会から3教会合併の話がきたので、それを具体的なきっかけとして練馬の教会委員会で話し合ったのがはじめです。

田中 では何故マルチンがそういう提案をしたかというと、建物がだいぶ古くなり建て直すために募金をしたのですが、結果的に集まらなかったんです。その原

因はいろいろあると思うのですが、みんなが本当にこの場所で建て直していいのかという気持ちがあったのだと思います。それは中村淳司祭から将来的に池袋や練馬と合併した方

がいいという話があり、そういう思いが何があってもここに教会を建てようというモチベーションに至らなかったんでしょ。そこで教会の今後について信徒で考える「フォーラム」という自由に話し合う会を一年半くらい続けました。その中でこの宣教に関して先が見えてこないということになり、教会委員会で検討して練馬や池袋と合併の話をしてみようということになったのです。

― その話はスムーズに受け入れられたのですか。

田中 私の印象としては割と練馬ではスムーズに受け入れられたのですが、

下泉 準備ができていましたからね。

田中 池袋は唐突といった感じで、一部の信徒を除き、かなり受け入れるのに困難があったようにです。

照岡 多分、池袋に合併の話があったのは2年前くらいで、そ

の前から合同の礼拝はありましたが、聞いた時は「エッ」という気持ちが強かったですね。練馬と違って全く準備ができていましてから、みんなが驚いてどうしようという時間がすごく長かったです。とても温度差があったのですが、時間をかけて話していくうちに、池袋も高齢化が進み信徒も減少して、このままでは5年、10年先は不安だということから一緒にすることを考えるようになってきた。

― 現在ではなく将来のことを考えて決断したわけですね。

照岡 今は大丈夫ですが、先のことを考える中で段々と信徒の心が動いて行ったのだと思います。

― 司祭から見ても、その辺のいきさつはどうだったのでしょうか。

卓 もちろん始めは合併とかという考えはなかったのですが、礼拝を合同でするようになる中で少しずつ一緒になってもいいのではという気持ちになっていったと思います。

特に本格的に動き出したのは再編成のことでも大きいのですが、中村淳司祭の異動があり河野裕道司祭が亡くなり、これは河野司祭が何か一つになるよ

うに促しているんじゃないか（笑）、と思いました。

大事なことは合同礼拝から始まったということですね。

下泉 河野司祭が自分がお手伝いすることによって、何となく3つの教会が治まってるんじゃないか、とおっしゃっていると同じました。おそらく河野司祭の中には将来的には合併した方がいいというお考えがあったのではないのでしょうか。

卓 それは本当によく言っていましたね。合併に動き出したといっても順調にはいかなかったのではと思いますが、それぞれの教会でネックになったことかはあります。

照岡 ネットとかどうかは分かりませんが、教会に来ていない方たちが知らない間に教会が無くなっていたというのはまずいよね、ということがあり、一番心がけたのは、とにかく情報を伝える、合併に関する郵便物は頻繁に送らるようにしました。中にはあまり頻繁に送られて来るので、教会からの郵便物を見るのが嫌になったという人もいたみたいです。（笑）

田中 今考えると、一緒になろうという気持ちが一番強かったのはマルチンだと思おうので、ネックになったようなことはあまりなかったと思います。それは多分司牧してくださった司祭の考えも大きかったですし、そのような人事をした大畑主教の思いもあったでしょう。ただそ



の大畑主教が途中で辞められたというのがネックといえど、ネットワークだったかもしれない。

― マルチンとしては大畑主教の出身教会として主教の考えを付度したわけですね(笑)。

田中 別にそういうわけではなくて、主教の考えがいいと思いついただけです。ただ旗を振ってくれるはずの主教が辞められて、教区がどういう形で後押しをしてくれるか心配でした。

でも逆に言えば、それで信徒が主導してやるしかないという気持ちになったのも良かったんじゃないでしょうか。

― さつき司牧されている司祭の考えも大きかったとおっしゃっていました、それによって信徒の思いは簡単に揺れるんじゃないでしょうか。

田中 それは現実として、大きな影響があります。

下泉 再編成の中でエリア制を見直すという動きがあって、私たちはその教区の方針と一緒にしようとしたのですが、そのエリア制が無くなった時にとまどいはありました。ただもう動き出してしまっただから、今さら後戻りはできない状況でした。

― もうみんなが同じビジョンを持っていたのですか。

下泉 練馬の教会委員は比較的若い人が多いので、一緒になったらあれも出来る、こんなこともしたいなど前向きな人

が多かったように思います。ただ3つの教会が一緒になるという時、練馬が母体となって「来てくれるならどうぞ」という感覚があったことは、全体として否定しきれず、新しい教会を「から創っていく」という覚悟が、他の教会に比べ、やや足りなかったように思います。それが練馬のネットワークでこれからの課題にもなるかなど感じています。

― やはり人数の多い教会の影響力は大きくなるのではと思いますが、司祭として一番大変だと感じ、そのために心がけたことは何でしょうか。

卓 今もそうですが、愛着というか執着があって、たとえば新しい教会の名前を決めるため公募したのですが前の教会の名前を書いた人が何人かいました。また反対する理由として「私はこの教会でお葬式をしたい」「私が居なくなったら無くなっていい」などお気持ちは分かりませんが、目に見えるものへの執着、また目に見えないものでも、今まで自分たちがしてきたことを変えてほしくないという方がいます。

私たちが一緒に大きな理由は「安定的な礼拝」と「地域への積極的な宣教」ですが、とにかくそのことを理解していただくことを心がけました。

― 場所や距離的な抵抗感はなかったのでしょうか。

田中 始めは何処か新しい場所を探してそこに教会を建てることを考えました。

今ある教会で一緒になると、その教会に吸収合併されるという感じが強くなりますから。ただ探してみましたが東京で、しかも3教会にとつて便利な広い土地がなかなか見つからないんですね。

卓 また土地があったとしても新しく引っ越してくる宗教施設に対しては違和感があるようです。

田中 それならば、練馬の土地は160坪以上ありますから、そこで建て直しましょうということになって計画を進めています。

― そうなると、さつき言われた練馬以外の教会は吸収併せられるという思いにはなりませんか。

田中 危惧はしましたが、今はそのように思う人はほとんどいないですね。練馬の人もそのことには気を使ってくれていますし。

― さつき合併の理由として「地域への積極的な宣教」と言われましたが、確かに私の知る限り管理牧師体制の教会で信徒が増えるというのは難しい、徐々に減っていくのが普通です。そういう意味では合併して牧師がいるというのはいいと思えるのですが、ただ牧師は皆さん忙しく、特に卓先生は普段教会にいないことが多いと思いますので、あまり状況は変わらないのではと思っております。

卓 管理体制と大きく違うのは、牧師が定住しているということです。昼間いなくても必ず教会には帰りますので、そこ

で何かあれば信徒の状況は把握できます。管理だとその辺のことが十分できません。また定住というのはその町内の住人になるということですから、それは地域宣教にとつて大きいことです。

下泉 以前は、イースターやクリスマスは自分たちの教会でいたいという思いが強くて、司祭は午前と午後で礼拝するなど掛け持ちで礼拝をした時もありましたが、聖餐式は心を込めて行うので1回だけでも大変疲れるという話を聞き、そんな風に牧師を礼拝屋さんみたいにするのは違うのではないかと話したら、年配の信徒の方がその事をすごくよく理解してくださって、司祭が司祭の仕事を一杯できる環境を整えるためには、個人の愛着を捨て、一緒になるべきと言ってくれました。

― 3教会ではこのことをきつかけに教会の本来のあり方はどうあるべきかについて十分な話し合いを重ねてきたと思います。他の教会でも、また教区でもこういう話をもつとするべきだと思いますか。

下泉 再編の時にアンケートや各教会を尋ねてそういう話し合いをしてきました。充分ではなかったかもしれませんが、その時に教会とは何かということ意識した人も多かったと思います。再編の話はいったん中止になっていますが、今回の3教会の合併をきっかけに、同じようにいうことではなく、皆さんが、自分たちの求めている教会は何だろうと考えて

くださればいいと思います。今日の話し合いもそういうきつかけになればいいですね。

― このことがどうなっていくかが他の教会にとっても大きな刺激になると思いますが、合併後のヴィジョンといいますか、こういうことをして行きたいなど具体的なイメージとかはありますか。

田中 私の個人的な考えですが、教会の教と聖職者の数が一致しているのがベストだと思うので、これをきっかけに、こういう動きが活発になってほしいと思います。

教会は信徒だけのものではなく、本来地域の人たちのものでもあるべきで、その人が教会に訪ねて来たとき、誰もいない、教会が閉まっていたというのでは、とても地域に開かれた教会などとは言えないですよ。

照岡 ヴィジョンという訳ではないですが、この選択が間違っていないかと思えるようにしていきたいと思っています。愛餐会やオルターの仕方、礼拝の中でも、極端には違わないのですが、細かな違いがすべてのことにあるので、話し合いながら進めていく必要があると思います。

― 池袋は場所的にもいい所にありません。何か別の働きを考えるとということはないのでしょうか。

照岡 私たちがどうしたいということではなく、新しい教会の一部としてどう活用するかだと思います。

下泉 とにかく始めから目指していたものは、教会の原点に帰ること、私たちは宣教をするために集められ、そして派遣されていく訳ですから、その派遣の部分が弱かったということを考え直し宣教をしていきたいと思います。ただ現実的には先程照岡さんが言ったように、内部での調整が大変なんです。しかもこれから財政や建築のことなどがありますから、それに翻弄され目を奪われることなく、どうして一緒にあったかを見失わないことが大事になってくると思います。

― そのために何か教会として考えていることはありますか。

下泉 通常の教会委員会だけでは対処できないので、常設委員会として「財政、宣教、礼拝」の3つと、その他に特別委員会として池袋伝道所をどう活用するかという「伝道所委員会」と「建築委員会」を作りました。

そしてヴィジョン的なものは3つの常設委員会で考えていきます。

― 合併に至るまでは様々な検討をしてきたと思うのですが、具体的にどんなことをしてきたのでしょうか。

下泉 まず常設委員会の前身として「財政プロジェクト、宣教プロジェクト、礼拝プロジェクト」の3つを作り話し合ってきました。その中で宣教プロジェクト



がしてきたことは、この土地がどう土地柄であるか、どういうことが求められているか、近くにどういう施設があるかといった背景の調査をしました。そこから今私たちが出来ることは何か、アクティブにまた早い時点でポイントを絞って行っていきたいと思っています。

す。1つは前向きでポジティブ・シンキング、2つ目は何故イエスは自分で全部しないで弟子たちを使つて宣教したのか、そこに大きな意味があると、牧師も信徒も足りないところを補い合いながらやっていくという言葉が印象に残っています。

また、礼拝についても平日に宣教的な意味での礼拝、信徒でない方が来ても何か一緒に出来る礼拝の仕方とかを礼拝委員会で考えていこうとしています。

― ポジティブに発想を変えてみんなが出来ることで協力するということですね。

卓 私のヴィジョンは難しいことではなく、きちんと礼拝して、その礼拝でいただいた恵みを隣り人と分かち合うという極めて当たり前のことです。そのために今までしてきたプロセスは非常に良かったですね。何故聖餐式をするのか、何故愛餐会をするのか、その他

― 最後に、新教会になると、数多くいる不参信徒たちの事が心配なのですが。卓 まず教会に通えるのに来ないという方は、その人の信仰の問題です。物理的に遠くなって来れないという方には、これから牧会チームを作つて送り迎えを考えていますし、すでに何人かの方からは近くの教会に移りますという連絡を受けています。今回のことは、普段教会に来ていない方にとつても、自分の信仰を見直す機会になると思います。

教会でしている一つひとつについて丁寧に確認する機会となりましたから。それこそ平日に何度も集まり、毎週のように委員会、懇談会を開いて話し合いを重ねてきました。

― お話を聞いてみると、合併までにはもの凄い努力、エネルギーが必要だと感じました。残念ながらそのエネルギーもない教会に対して、何かアドヴァイスがありますか。

卓 高橋主教が2つのことを言っています。

― いろいろな問題に対して丁寧に考えていることが分かりました。今日は長い時間どうも有り難うございました。

司祭 バルトロマイ 竹内 謙太郎師
東京聖三一教会 後藤 務

竹内先生を主の御許にお送りしてから2ヶ月になろうとしています。今までのようにお目にかかったりお話しできない悲しみの一方で、「後藤君、次はいつ家に来ますか」と御連絡頂けるように思ったり、「これは竹内先生に教えて頂かなくては」と思わず考えてしまったり、と先生のおられなくなられた実感がまだ受け入れられないような自分があります。

先生とは40年を超えて親しく交わりを持たせて頂きました。この間、東京教区の聖職として主教であった父を支えてくださった竹内先生、聖三一教会の牧師としての竹内先生、牧会者としてわたしたち家族を支えてくださった竹内先生、そしてわたし自身の学びの師としての竹内先生それぞれへの思い出が次から次へと浮かびます。

聖三一教会の牧師としては、当時、保守的な長老の方々からは相当なご批判もあったように思いますが、若者達を積極的に支援・指導し、教会の中で多くの働きをする機会を与えてくださいました。若い人たちは毎週のように土曜日になると教会に集まり、先生から、聖書について、教会の歴史について、世界の教会についてなどを、さまざま泊まり込んで翌日の礼拝に出ることもしばしばでした。また、現在では各教会で行われているイースター・ヴィジルのような礼拝に先駆的に取り組み、若い人たちと共にを行いました。主教練にきて頂き、洗礼・堅信を含んだイー



先生は、「責任」と

いうことを良く語られていました。先生は、神様に対する責任、教会に対する責任、仕えるべき隣人への責任、を最後の最後まで聖職として果たすことを追い求めておられていたのではないのでしょうか。神様の前の天の宴で席を共にできることを祈り、願い続けたいと思います。どうぞ神様の御腕の中でゆつくりお休みください。

キリストよ、
君が僕を聖徒達と共に
もはや悲しみも苦しみも、
嘆きさえなく、
尽くることなき生命あるところにて
憩わせたまえ
(ロシア正教死者のためのコンタキオンの一節)

追悼

司祭 マルコ 野田 昭次師
司祭 中川 英樹

「君はね、60点。」神学校を卒業して、はじめて赴任した先の教会での、わたしの働きにつけられた点数である。採点者は野田昭次司祭。定年を迎え、自由になったので、東京教区内の各教会を廻っているとかで訪ねて来られたときのことである。どうやら野田司祭の評価基準によれば、わたしの働きは、合格ギリギリの及第点だったようである。野田司祭は、わたしが聖職を志願するときの推薦司祭でもあった。信頼できる、その司祭につけられた点数に異論はなかった。

野田司祭は、1992年からわたしが神学校に行く1995年までの3年間、聖マーガレット教会において、わたしの牧師であった。もう30年近くも前のことになると、野田司祭が赴任された当時、聖マーガレット教会には未解決のままの課題がいくつもあった。それらの課題を巡って、その解決方法の可否について、決断において、ずいぶん意見が乱立し、教会に行くことが「喜び」とは想えないようなこともあった。誰もが前に進めない中、赴任間もない野田司祭が、それらを「終わらせてしまつた」のである。たくさんの反発があつたし、批判が野田司祭に集中したが、そのときの野田司祭は岩のように動かさず、決して持論を曲げようとしなかつた。牧師としての「強情さ」が彼にはあつた。野田司祭は、その



をゆるされた者として、

あのとき、野田司祭が伝えんとしたことは、人が語る百の慰めの言葉よりも、聖書の中に綴られた、一つの神の言葉にこそ慰めの力があること、それを野田司祭は伝えようとしたのではないか、と今になって思うのである。

「君はね、60点。」人が神の前で誇れることは精々60点程度なんだ、とニタツと笑う野田司祭の顔を思う。神に信頼し、神の言葉を愚直に生きた野田司祭に採点してもらつた、この点数を、この先も、わたしはずっと大事に歩んで行こうと、師の帰天に際し想っている。
野田先生、ありがとうございました。

退職に寄せて

折壁駅頭で、つかまっつて

司祭 パウロ 佐々木 道人

皆さんは岩手県JR大船渡線「折壁駅」をご存知だろうか。



1960年代立教大学BSAの「折壁キャンプ」が存在し、その拠点である折壁の「室根聖ナタナエル教会」は、後の2011年東日本大震災の折には気仙沼支援の拠点となった。8年後の、今年3月11日には大震災8周年記念の礼拝が当教会で行われたと聞く。

55年前1964年、私が立教高校1年の夏、親戚がある気仙沼を訪れた。更にそのまた親類の折壁の古い農家にも一泊した。翌朝気仙沼に帰ろうと夏の朝、静かな折壁駅のホームで列車を待っていた。突然がやがやと一団がホームに現れた。するとその中の小柄な爺さんが私に歩み寄り「お前、立教だな、この上で立大の学生がキャンプしているから手伝って行け」と命令し、自分は列車に乗って去った。学生達はその老人の見送りだったのだ。彼等に半ば拉致され教会に連れて行かれ、餅つき大会用の白を近く

の農家で借りるためリヤカーを引かされた。その晩つきたて餅を大学生たちと20個も食べくらべた。夜のキャンプファイヤーではベートーベンみたいな風貌の学生がアルト・ハイデルベルクを大音声で歌うのに驚いた。3年後立大入学後、このベートーベン氏と再会。その先輩が鈴木育三さん（北関東教区退職執事・新生会常務理事）だった。

その後育三さんが茨城県の障がい者施設の勤務を辞め、神学院のスタッフになるので施設の後任にと呼ばれた。同時に共に辞める彼のフィアンセの後釜に、後日私の妻になる人をも呼び寄せていた。

13年後30歳半ばの私に洗礼を勧め名親になってくれたのもこの鈴木育三さん。

折壁駅頭で私をつかまえたのは立大の竹田鐵三チャプレンだと後で知った。もし私が学帽をかぶっていなかったらチャプレンにつかまらなかった。しかし当時BSAの学生達も、農作業の手伝いの時学帽をかぶっていたという証言を聞いた。昔は「伊豆の踊子」の映画のように、学生は旅行中着帽するのは当たり前だった。もしその時、私が無帽でいたなら、鈴木育三さんとも、妻とも出会うはずもないし、信徒にもならず、更に神学校に行くことはなく、ましてや牧師になることはなかったと思うと可笑しくなる。

聖職定年を迎えて

司祭 オーガスチン 杉山 修一

神学院を出て43年、司祭に按手されて38年、内36年間はキリスト教学校



教育に携わりました。聖職としての働きの大半は学校勤務でした。東京教区の方々と牧会を通じての交わりはわずかな期間しかありませんでした。神学院卒業後の聖救主教会、聖アンデレ教会での7年間の経験しかないのです。加えて聖救主教会では併設の勤労青少年センター主事として青年活動、また幼児教育施設キッドスクールの創設、まこと保育園の設立準備と社会的活動が中心でした。社会的活動ばかりでは聖職になる訓練は不十分と判断され、その後主客座聖堂である聖アンデレ教会で厳しく毎朝の聖餐式、聖書研究会、牧会訪問等4年間に亘り牧会経験を積ませていただきました。この間に執事、司祭に叙任され、副牧師として働きましたが、その後牧師として一人で司牧責任を持つ経験をすることなく定年を迎えることになりました。

立教女学院、プール学院でキリスト教教育に携わると共に、多くの教会で主日の御奉仕は経験させていた

できました。大阪に赴任する前、私の母教会である千住基督教会、また神愛教会には都合3年間ほど定住させていただき、わずかですが、牧会の喜びも経験させていただきました。立教女学院で21年、大阪のプール学院で15年、長い学校での働きを続けながら願っていたことは学校と教会との関係をもっと親密にできないか、生徒、学生を教会につなげることはできないかということでした。現実には生徒、学生を教会へと導くことはとても難しいことを痛感してきました。現在、キリスト教学校は子ども学校経営に苦勞しており、生徒募集、学生募集に困難を抱え、キリスト教教育を活性化していくことは、たやすいことではないのです。しかし、キリスト教学校の創立理念を見てもイエス・キリストとの人格的出会いを意図していることが明らかであって、なんとしてもそのことを実現するために教会との協働が必要であると強く感じています。聖職定年を迎えて、4月からは神学生の頃主日勤務させていただいた、聖パウロ教会で囑託として働かせていただく事になりました。与えられた限りある時を、牧師として力を尽くしていきたいと決意しています。

退職するにあたり

司祭 グレース 神崎 和子

私は、性別によらず、多くの人が、教会の奉仕職、特に叙任された奉仕職に



召されて働くことは、教会を豊かにすることだと思っています。そして現在でも、それは教会が多様になることで、教会の視点が広がり、色々な可能性が広がり、結果教会が豊かになることに繋がっていると信じています。

日本聖公会では、1998年日本聖公会第51（定期）総会によって、女性にも始めて司祭の道が開けました。この結果をうけて、私は翌年1999年に聖公会神学院に入学しました。ちょうど20年前のことです。

私は入学から3年後、2002年に聖公会神学院を卒業しました。そして私の東京教区における、教役者としての歩みが始まりました。そして池袋聖公会、大森聖アグネス教会、最後は三光教会勤務につき、それぞれの教会での勤務は思い出深いものがありました。

池袋聖公会は、神学院を卒業して間もない未熟な私を多くの方々が支えまた励まして下さいました。特に印象深いのは、毎年8月15日に行われる「敗戦記念日」の礼拝です。多くの方々のご協力を得て、

戦争の体験を話して頂きました。いまでもよく覚えていてるのは、故福島国男さんの神田キリスト教会の礼拝堂が戦火で燃え落ちるのを必死で消火した話です。死を覚悟しながら消火されたにもかかわらず、結果教会は焼け落ちてしまったそうです。その当時を思い起こされたのか、目は涙で潤んでおられたことを今でも覚えています。そしてその話をされた後、平和の大切さを叫ばれたのです。

また大森聖アグネス教会では、近所の小さな子どもさんと保護者に教会を開放し、教会が地域と共に歩む働きを信じて、教会が地域と共に歩む働きを信じての方々と始めました。当初の小さな活動の輪が今では大きく成長発展し、その活動が大きく花開いている状況は、大きな喜びです。

また三光教会では礼拝を中心としながら、他方地域に向かって開かれた教会として、町内の方々と共に防災訓練などを始めました。それらのつながりを通して、教会バザーの協力を町内の方々がしてくださり、お互いに顔の見える関係が出来ました。礼拝の面では、特に毎朝行われる、朝の礼拝・聖餐式を献げ守ることを、休まず続けられたことは、ただ感謝という他ありません。一日の始まりを礼拝から始めることが出来ました。いろいろな雑事に流されそうな時も、まず神様に向かい合い祈りを献げることによって導かれ、守られたことがどれほど恵み深いこ

とかと思います。

多くの方々のお支えとお祈りによって、退職を無事に迎えられますことを改めて感謝しています。

「デキゴトとしての教会」に仕える

司祭 アンデレ 中村 邦介

キリスト教会に人一倍疑問や批判を抱いていたにもかかわらず、勢いあ



まあって、私は「この道」に迷い込んだように思います。「団塊の世代」に属していたことも、確かに大きく影響しているでしょう。

神学校を卒業してから定年まで、またたく間の41年。派遣先の大部分は神学院、聖路加病院、立教女学院という聖公会関係諸学校・病院でしたが、聖マルコ教会をはじめとして幾つかの教会の管理を含む牧師としても働かせて頂きました。顧みると、ただ情けない恥ずかしさと不甲斐なさで、本当に神と教会に赦しを乞うばかりです。よく「ストレスを抱え込まないように」と忠告を頂いたことを家族に話すと、「あなたの場合は心配ご無用、ストレスを与えている方だから」と、奇妙な慰めと励ましを貰い続けました。

以前私は週刊朝日の連載コラム「デキゴトロジー」の熱烈な愛読者でした。何

度か投稿しようと考えた位です。毎日の人々の生活に溢れている様々な「デキゴト」が、本当に可笑しく面白いのです。特に失敗したり、勘違いしたり、人々の意図せず侵してしまう悲喜劇のデキゴトの数々に私は心からの快哉を覚えたのです。

今教区の聖職として退職となり振り返ると、まさにこの「デキゴトロジー」さながらの物語がありました。それはほとんど「偶然によるデキゴトロジー」なのです。自分から積極的に行動したというよりも、むしろ圧倒的に突然舞い込んできて、甚だ迷惑や厄介と思われる出来事、躊躇せざるを得ない事柄などが、生来怠け者の私に迫ってくるのです。しかし極めて否定的な受けとめから始まったその偶然は、その後全く予期しない展開となることが多々ありました。たとえ不甲斐ない動機からであっても、その偶然が自分の受けとめや予想を遥かに超えて、意味あるデキゴトとなるのです。

おそらく教会は多くの未だ気付かない隠れたデキゴトに溢れている場所でしょう。そのようなデキゴトの中に教会の物語が生まれているのです。

「デキゴトとしての教会」が教会を根本的に支え導いていくことを想起しながら、皆様への感謝のご挨拶とします。長い間お支え下さり心から感謝いたします。(デキゴトロジーより)

竹田主教文化庁長官表彰受賞

去る3月23

日(土)に、
主教ヨハネ竹
田眞師父は
「文化庁長官
表彰」を受賞



されました。これは、「永年に
わたり、宗教者として活動し、
日本宗教連盟の理事を務める
など、日本の宗教文化の振興
に尽力するとともに、宗務行
政に多大な貢献をした」こと
が表彰されたもので、宗教者
への表彰は、今年度が初めて
となりました。

「新しいいのち」にいきる

聖職候補生 荻原 充

3月5日に聖公会神学院を無
事卒業することができました。
これまでの皆様のお祈りとお支
えに感謝しております。

私は、7年前に聖路加国際
病院にて卵巣がんで妻を亡く
したのをきっかけに受洗し、
今に至っております。妻を亡
くしましたが、その出来事が
なければ、こうして同じ志し
や同じ生き方・価値観をとも
にできる方々と、祈りによつ
てつながることはなかった。
そう思うと、有難いと思うよ

ちょっと聖書、ときどきユーモア (四十二)

1. カエルの子は・・・

父親「お前はまた日曜学校で騒いで、先生を困らせたそう
じゃないか、みんなお前のことをなんて言っている
か知ってるか」

息子「はい、お父さんの小さいときにそっくりだと…」

2. 変化

信徒A「たとえば仏教からキリスト教に変わるといった信
じる宗教が変わることを何て言うか知ってる？」

信徒B「改宗とか言うんじゃないの」

信徒A「違うよ、心変わりという意味で“信教(心境)の変
化”って言うんだよ」

3. 責任

主教「牧師は教会のいろいろな問題について、責任ある立
場を取らなければなりません、君にはその覚悟が
ありますか？」

神学生「もちろんです。今までの職場で何か問題があると、
みんな僕の責任でしたから」

うになりました。それぞれ一
人ひとりの痛みや悲しみは異
なります。しかしながら、痛
みや悲しみというものを身に
沁みて知っているとこの意味
において、互いにつながるこ
とができるのではないかと私
は考えます。なんだ自分はずつ
と神に与えられたいのちにつ
ながっていたのではないかと、自
分はいのちのつながりの中の
一員だったのではないかとい
うことに気づかされ、
確認させられるのが
教会という場ではな
いでしょうか。そ
ういう場において、
これからの務めが私に与えら
れていることに感謝したいと
思っております。



キリスト者になる前は浜松町
にてフレンチビストロを経営し
ておりましたが、料理人と聖職
候補生とでは見た目にも大分違
いがありますけれども、内面で
も大きな変化があったように思
います。それは、死というもの
に直面することになって、人間
とは有限であり、老いや病に対

しては無力で弱く痛む存在であ
るという視点から物事を見るよ
うになったということです。そ
の視点から見ますと、日常のな
んの変哲もない、当たり前の
日々の光景が、何かヴィヴィッ
トに、鮮やかに見えてきます。
当たり前の日常の中には語るべ
き新しいものがある。輝かせる
べき不思議な魅力がある。解き
明かすべき神秘があると思うよ
うになってきたのです。何もし
なくてもただ「生か
されて在る」そのこ
と自体がとても大切
なことであるとい
う実感が湧いてくるの
です。

《信徒リレーエッセイ》
標語 100周年
つなげよう希望の未来へ
大森聖アグネス教会
阿部 裕
大森聖アグネス教会は、来年
2020年に創立100周年を
迎えます。記念日を迎える為
実行委員会を立上げ、100周
年を、何を大切に迎えたいの
かを話し合い、掲題の標語を決
めました。
100年の長い歴史は、歴代
の司祭様、数多くの諸先輩達に
よって築き上げられ、その上に、
私達は世代を超えて、生き生き
と喜びに満たされながら集える
教会として100年を迎えたい
との想いを込めました。
2011年には、「アグネス
幼児クラブ」、そして2016
年には、「子ども食堂」を立ち
上げ、与えられた賜物を生か
す喜びに満たされることを実感
し、その喜びを教会外の地域の
人達とも共有できることを、い
ま感じています。
この希望を次の世代に繋げて
いくことを、私達の100周年
記念の業として、お献げしたい
と思えます。

次回ペンテコステ号

6月9日発行予定